

何らかの障害を持った方も、認知症の方も、小児も、成人も、高齢者も、  
「みんなが同じ場所においても自然な形でいられる地域を」

米原市地域包括医療福祉センター「ふくしあ」センター長 <sup>なかむら</sup> 中村 <sup>やすゆき</sup> 泰之 氏

米原市で地域医療、そして「全世代型地域包括ケア」に取り組む中村泰之先生。

今回、ことう地域チームケア研究会の4周年記念企画としてご講演いただいた後、彦根医療福祉推進センター長、切手先生との対談形式で、参加者の皆様からの質問をお受けしながら、さらにこれからの夢、思いについてお話いただきました。その様子を一部紹介します。

### <中村先生のプロフィール>



滋賀県出身。自治医科大学卒業後、大津赤十字病院、石部町立石部医療センターで勤務。その後、国民健康保険診療所塩津診療所に赴任。地域に溶け込み、複数の診療所をかけもちしながら7年間を過ごす。ここが中村先生の地域医療の礎になる。

2006年、公設（米原市）民営（公益社団法人地域医療振興協会）の「地域包括ケアセンターいぶき」で地域医療や介護の必要な方の支援に取り組む。

2016年、保健・医療・福祉サービスを包括的に提供する施設「米原市地域包括医療福祉センター ふくしあ」を開設。現在、センター長を勤める傍ら、月に200件以上の訪問診療に携わっている。

## 全世代型地域包括ケアに挑む

『“ふくしあ”では、小児から高齢者まで様々な方々を対象に取り組みをされていますが、経営的には大変ではないのでしょうか。行政の方との関係など苦労や工夫をされている点をお聞かせください。』

中村先生 『“ふくしあ”を立ち上げるのはそんなに簡単なものではありませんでした。行政とも何度も話し合いを重ねてきました。一つのことをしようとするのに、十個くらいのことを妥協しながら、それでも進めてきました。そのくらい実情は大変です。』

行政との調整も大変ですが、地域医療振興協会（\*注1）という組織も公益社団法人という立場ですから、非常に難しい問題が多々ありました。

行政ともいろいろとやり取りをしてきましたが、実際には行政の問題ではなく、いろんな機関を全部動かさないとできないこともあるので、行政担当の方は一生懸命してくださっても無理なところもありました。』



「\*注1）公益社団法人地域医療振興協会」は、地域医療を支援し、それによって地域の振興を図ることを目的に設立されました。日本全国の地域、そこに住む人々、そして医療に携わる医療人の三者が幸せになれる未来を作っていくため、活動されています。

## 行政と協働して…より良い支援を追及

中村先生『実は、児童発達支援センターは経営的に一緒にできないと思っていました。でも、そこは行政が補助をしてくれてできるようになりました。だからそれをプラスマイナスにしながらやっています。』



しかし、行政からの補助に甘んじているのであれば、行政が行政としてされているのと一緒にの形になります。

行政におんぶに抱っこで、行政の持ち出しを多くするのであれば、民間でやる必要は全くないと思っています。

全世代型包括ケアを行っていかうとする中で、経営的に損をしてしまう部分は行政から補填されていて、民間で実践をしているのですから、私たちは、より良い実践を追及して、努力をしていかなければならないと思っています。このことをいつも職員に話しをしながら取り組んでいます。』



フクシア  
花言葉は、「交友・信頼・暖かい心」

## 多職種がつながるといふこと

『ことう地域チームケア研究会は、多職種が集まっていますが、多職種が集まり上手くやっていくコツや、こういうふうにしていくといいよ、という何かヒントがありましたら教えてください。』

中村先生『一つだけ言うならば…、飲み会をする（笑）。ほとんどそれで誘ってきている（笑）』

切手先生『語り合う場、大事なことですよね。』

そこで、先生の思いに共感し、「ふくしあ」で働かれている専門職 A さんにコメントをいただきました。

A さん『中村先生に誘っていただいて感謝しています。今まで、高齢者に関わってきましたが、“ふくしあ”は、小児にも対応していますので、今、保育士さんと一緒に仕事をしています。その中で、多くの刺激を受けています。保育士の方の子どもたちに対する思いはとても強く、その思いに刺激され、自分自身の今までの取り組みを振り返りながら、次一緒にやっていくにはどうしたらいいのか考え、過ごす日々を送っています。高齢者に関わってきたことも生かしながら、やっぱり次世代を育てていくということで、多職種でうまく協働、連携して支援を行う必要があると感じています。』



## みんな一緒に過ごせるということ

『全世代とのつながりや出会いで印象的だったことは何ですか』

中村先生『衝撃的だったのは、障害をお持ちのお子さんとその弟とお母さんが三人でスーパーに買物に行った時の話を、そのお母さんから聞いたときです。

三人はそのスーパーで周りの人にじろじろ見られたそうです。下のお子さんは「何でこんなに見られるんやろ、有名人なんか」とお母さんに話したそうですが、お母さんはこのとき「障害を持っている、車椅子に乗った子を一緒に連れてスーパーで買物もできないんやな」と感じたそうです。

この話を聞いた時に、障害があっても普通に買物が出来て、普通にみんなと一緒に居られる社会を、地域ごとに造っていかなければいけないのではないかと、という感情を抱きました。お母さんが、私にぽっと話されたことなのですが、それがすごく大切なことだなという気がしたのです。』



## 様々な出会いの中で感じる大切なこと

中村先生『今、全世代型の地域包括ケアに向かって挑戦をしていますが、その中で大事なことを教わっているほとんどが、お母さんであったり患者さんの家族であったり、もしくは歯科衛生士さんなど多職種の方からだったりしています。いろいろな人と関わることで教わる機会をいただけるのが一番ありがたいと思っています。そして、そういうつながりをこれからも目指していきたいなと思っています。』

## これからの地域づくりについて

中村先生『地域医療では“六方よし”だと思っています。“医療よし・患者よし・首長よし・官僚よし・議会よし・地域よし”です。そして、さらに“〇〇よし”を増やしたいと思っています。



地域の農業や企業を全部巻き込みたいと思っています。例えば、スーパーで買物をしながらリハビリができたりするように、施設の中、家の中でのリハビリだけじゃない、地域の中でもできるようなことをしたいなと思っています。

このようなことをしようと思うと、うちの持ち出しだけでは絶対無理なので、地域の企業さんたちと“Win-Win”の関係を作らないといけないなと思っています。企業さんにとってもメリットがあって、うちにとってもメリットがある状態です。そして、これは保険外で作っていくようにしないと、おそらく医療保険、介護保険はパンクするだろうなと思っています。』

切手先生『生活そのものがリハビリということですね。とても素晴らしいお考えだと思います。』

中村先生『本当は“八方よし”目指して、もっと“〇〇よし”を増やしたいのですが、今、まだ考え中です。』

切手先生『ぜひまたお聞かせください。』

誰もが安心して暮らせる地域をめざして、まだまだこれからも地域医療・福祉の発展に挑戦し続ける中村先生。「ふくしあ」での実践、先生やスタッフのみなさんの熱い思いは、湖東地域でのこれからの地域包括ケアを考える上でとても刺激になりました。

今回の研究会に参加された方からは「湖東地域でも、目指す地域像をみんなで話し合いたい」との感想が寄せられ、今後につながる有意義な時間を、多職種で共有することができました。

中村先生、ありがとうございました。

## <インタビュー者の紹介>

### 彦根医療福祉推進センター長 きって 切手 としひろ 俊弘 氏



鹿児島県出身。大分大学医学部卒業後、外科医として福岡県、大分県の病院で勤務。消化器外科医として地域の病院で研鑽を積む機関に老人医療の重要性に気づく。2001年よりストーマケアを活かした創傷管理で褥瘡治療の勉強を始める。寝たきり高齢者の嚥下摂食障害などに対して経管栄養の管理・胃瘻造設などのかかわると、在宅ケアの勉強を開始し、病院からの在宅総合診療を行う。

2007年より在宅医療の勉強を行うために、内科医に転身。外来と往診業務を行い、さらに高齢者に関わる必要性を認識した。

岡山県、広島県の病院で勤務した後、2015年1月より外科医として彦根市立病院に勤務。同時に地域医療機関との連携強化を図るため、病院との橋渡し役を担う。

2016年より、彦根市立病院の地域連携センター在宅医療支援室室長に就任。診療を行いながら、湖東圏域一市四町における在宅医療介護連携推進事業の拠点である彦根医療福祉推進センター（通称、くすのきセンター）のセンター長を務め、地域の多職種連携促進、在宅医療の充実に取り組みされている。